



2012年7月 第10巻第7号

## かく語りき—聖人の言葉

祈りを習慣としている者は、あらゆる困難をやすやすと乗り越えるでしょう」

(シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「気高い思いは祈りである。真摯な願いは祈りである。敬虔な望みは祈りである。悔恨の心が洩らす偽りのないため息は祈りである」

(ザラスシュトラ)

## 今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・今月の予定
- ・「スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、ラビンドラナート・タゴールと日本」  
第2部  
スワミー・メーダサーナンダによるスピーチ
- ・2012年6月の活動
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

## 8月の予定

### ・生誕日・

スワミー・ニランジャンナーナンダ 8月2日(木)

クリシュナ・ジャンマシュタミ 8月9日(木)

スワミー・アドワイターナンダ 8月16日(木)

### ・行事・

ハタ・ヨーガ・クラス

8月12日(日)、19日(日)、26日(日)、  
14:30~16:00

場所：アネックス

\*体験レッスンもできます。

お問い合わせ：逗子協会

### 逗子例会

8月19日(日) 10:30~16:30

逗子協会

皆様のご参加をお待ちしています。

## スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、 ラビンドラナート・タゴールと日本 スワミー・メーダサーナンダによる スピーチ

(全2部の第2部)

2012年5月27日 スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会（東京・インド大使館）にて

### ヴィヴェーカーナンダとタゴールのメッセージの普及と実現

さて、スワミー・ヴィヴェーカーナンダとタゴールが日本の人々のために残した深遠なメッセージをさらに研究し、広め、実現する手段はあるでしょうか。このことを簡単に議論してから、まとめたいと思います。



メッセージには、主に次の6つの分野があります。

- 1) 精神性
- 2) 仏教の復興
- 3) 調和
- 4) 仕事
- 5) 意欲

## 6) インドと日本の相互関係

### 1) 精神性

これを議論するためには、まず近代史において、国家の指導力をふりかえり、現在の日本のシナリオを探る必要があります。日本の近代史の研究からわかることは、日本は、何事もやり方を定め、集団として行動し、もし国民がその重要性を確信し、想定できる目標が持てれば、国家は奇跡をも成し遂げることが可能だ、ということです。最初の目標は、近代化でした。1930年代の次の目標は、軍事大国になることでした。次の目標は、第二次世界大戦での敗戦に代わり、経済大国になることでした。これは数十年にわたって非常によく機能してきました。しかし、1980年代以降は、景気の低迷と絶頂期の回復の兆しがみられず、国民が一団となって奮闘して達成すべき国家としての目標が存在しないようです。したがって、日本は国家として現在、重大な岐路に立っています。

それだけでなく、主に次のようなさまざまな問題が各方面で国民を悩ませています。

- ・政治的には、指導力が欠け、政権の安定がありません。
- ・社会的には、家庭崩壊が増加し、心の悩みや自殺が驚くべき速度で上昇しています。

- ・経済的には、失業と経営者の保身が増加し、GDPは着実に減少しています。
- ・宗教的には、仏教が人々に精神的な指針を与えることができず、争いばかりです。
- ・文化的には、伝統文化が魅力と人気を失い、西洋からの安価なものが溢れています。
- ・法と秩序的には、少年非行も含めあらゆる種類の犯罪が増加しています。

これらすべての問題に加え、常に自然災害の脅威があります。最近では、東日本の自然災害で損傷した原子力発電所による環境災害も発生しています。

これらの問題のいくつかは、近代化のプロセスに由来しながらも、第二次大戦後や近年に始まった問題もあります。

それでも、現在の厳しいシナリオであっても、特に法と秩序と社会倫理に関しては、日本は他の多くの国よりもはるかに良い状態であることは確かです。しかし、これに満足すべきではなく、問題が手に負えないほど大きくなる前に解決すべきであり、またそうすることによって、規範となる国家になるべきです。

このような問題の解決にあたり、タゴールとスワームージーが強調していた精神性の役割はどのように役立つでしょうか。まずこのために次の二つの点

を考えるべきです。

- 1) まず、日本の最大の資産は何でしょうか。
- 2) 日本の最大の弱みは何でしょうか。

私の意見では、この国が持つ最大の資産は人間です。ごく少数を除き、この国の人々の性格の特性はすばらしく、日本人は、どのような国家にも願ったとおりにその目標を達成させることができるのです。一介の旅人でさえも気付き、理解できる特性があるのです。たとえば、仕事に取り組む献身的な姿勢、目的に対する誠実さ、自制的な行動、我慢強さと忍耐力、公共の道徳的配慮、国家への愛、美学、清潔な習慣、実用主義などです。スワームージーもタゴールも観察していたこれらの資質のいくつかは、去年の日本の東北を襲った大地震と津波で、歴然と示されました。津波被害の映像が報道されたとき、世界中の人々が、被害者の忍耐と規律に感銘を受けました。

では、最大の弱みは何でしょうか。それも人間なのです。物理的なレベルではなく、心理的なレベルで、すばらしい特性をもった人々であるにもかかわらず、自己認識の危機で苦しんでいます。この自己認識の危機には、3つの側面があります。すなわち、錨（精神的支柱）の欠如、方向性の欠如、そして永遠に対する認識の欠如です。したがって、一般の人々は、精神的な錨や人

生の方向性、達成すべき高次元の目標がないままに、世の中のはかない出来事のみ追い求め、現在の生活上を漂っているかのようです。トラブルに巻き込まれたときに安心できるような人生の錨（精神的支柱）がないために、トラブルに直面すると、人はすっかり無力となり、狼狽してしまいます。永遠に対する認識の欠如により、はかない一時的なことだけを追求していると、人は、途方もなく不安になり、何かを失ったり、別離に遭遇したりすると、ショックを受け動揺してしまいます。最終的に、方向性の欠如により、人々は混乱し、自信を失います。このような状況は、架空のものではなく、様々な調査によって明らかにされました。

ヴィヴェーカーナンダによれば、人生の理想的な目標は、個人の生活のあらゆる側面に気づき配慮することです。つまり、身体、心、知性と精神に気づき配慮し、それによって、安定した喜びと知恵の状態を楽しむことです。そして、いったん、永遠なるものを認識することさえできれば、それが人生の錨（精神的支柱）になります。タゴールとヴィヴェーカーナンダによれば、この永遠なるものの認識が精神性の、霊性の核心となるのです。これなしには、たとえ人生において何百ものことを達成したとしても、常に苦しみや無力感に対して弱い人生になるのです。一方、永遠なるものを認識していれば、

世俗的な達成がたとえなくとも、充実した喜びと平和と知恵に満たされた人生にできるのです。

それでは、この永遠なるものを認識するために、人は、何か宗教に従ったり、寺院や教会に行ったり、何か宗教団体の会員になる必要があるでしょうか。

ヴィヴェーカーナンダは、こう言うでしょう。「そんなことは全く不要だ！宗教がなくても、寺院に行かなくても、宗教団体に入らなくても、神を信じることさえしなくても、永遠なるものをよく認識することができるし、またそれによって精神的に、霊的になれるのです。ただ、本当の『私』とは何か、を見つけさえすればよいのです。他の言葉でいいかえれば、あなた自身の中にある永遠なるものを、純粋な意識の中にあるものを、探ることです。それができれば、あなたは自分を強さと喜びと知恵の源泉に自分をつなげることができるのです。そしてそれはもともとあなた自身の中にすでに存在しているのです。このようにして人は、最も必要とされる人生の錨（精神的支柱）を見つけ、自信にみちた偉大な存在になるのです。」

しかし、それが難しすぎる場合、マクロレベルで、純粋な意識からの支援を受ける必要があります。つまり哲学者が究極の真理と呼ぶもの、信者が神と

呼ぶ存在や、ブッダや、イエス・キリスト、ラーマクリシュナなどのようにすでに純粹なる意識、つまり永遠なるものと自分をつなげている予言者からの助けを受けることです。

日本人が宗教的か否かについては、国内外の学者による多くの研究がありますが、私が思うに、より重要なことは、より靈的、精神的であるかどうか、です。靈性とは、さきほどの説明のように、人生における最も大きな死活問題であり、これは宗教的な民族だという他国の人たちにも同じようにあてはまることであり、またこのことがスワミーやタゴールのアドバイスなのです。

## 2) 仏教の復興

東京財団の理事長および慶応義塾大学教授の加藤秀樹氏は、日本における仏教の最近の状態を深く憂慮して、2008年にサウジアラビアのリヤドで開催された、「日本とイスラム世界間の文明の対話に関する会議」の演説の中で、日本の仏教が現代社会において生き残るとするならば、早急に現代文明に追いつく必要があると、発言しています。実際、かつての日本の仏教寺院の崇高な雰囲気はどうすればよみがえらせることができるか、心の平安と精神的な恩恵を得るために、非常に多くの数があるお寺を訪れることがどんなに興味

深いことか、そのような雰囲気をもよみがえらせることができるか、こういった課題に、仏教の指導者たちは取り組む必要があります。大衆の目に映る仏教の僧侶とその組織のイメージは、どのようにすれば改善できるか、ただ単に葬儀を行うだけでなく、僧侶は、信者が何よりも必要としている精神的な指導を与える仕事に、どうすれば再び就くことができるか、ブッダの教えを色あせさせずに、現代人に受け入れやすい方法で伝えられるか、といったことにも、取り組む必要があるでしょう。

仏教の復興について、私はヴィヴェーカーナンダと彼の師、ラーマクリシュナに関する研究は、間違いなく役に立つと思います。なぜなら、二人とも現代に生まれ、現代特有の社会環境や問題、そして古くから伝わる靈的な真理を現代人に伝える必要性を認識していたからです。現代人には受け入れやすく、多くの道を求める人々にとっては非常に効果的なことが証明されている方法で伝える必要がありました。二人の教えの価値とその伝え方は、今の時代を背景にした特徴的なもので、ヒンドゥ教徒だけでなく、非ヒンドゥ教徒や僧侶にも有益と思われてきましたし、ハーバード大学神学部教授 クルーニー牧師のような、宗教を研究する学者によっても、高く評価されてきました。

ラーマクリシュナ/ヴィヴェーカーナ



ンダの教えとその伝え方の特徴を幾つか例に挙げると、セクト主義ではなく、普遍性、自由主義、合理性、深遠でありながら明快、現代人の日常生活に関連している、等です。その上、ヴィヴェーカーナンダは、可能な限り、現代人が真価を認め、より説得力があると思っている、最新の科学、社会科学、哲学の観点から自らの教えを結びつけ、説明し、解釈しました。宗教を紹介する際に、仏教の指導者はこれと同じアプローチを取ることが可能です。



### 3) 調和

調和と普遍性についてのメッセージは、タゴールとスワームージーの仕事の最も重要で雄弁に進化した2つの側面です。例えば、タゴールによって設立された機関のモットーは、「Yatra Viswa Bhavati Ekanidam」で、「全世界が出会う場所」を意味しています。

調和の預言者、あるいは「信仰の数だけ道がある」という名言の創作者とみなされている、恩師シュリー・ラーマクリシュナによって生気を与えられたヴィヴェーカーナンダは、調和につい

でのメッセージをインドと西洋の両方で説きました。シカゴで開催された第一回世界宗教会議での歴史上重要な調和についての演説は、数世紀も経っているにもかかわらず、今現在にも当てはまるため、日本の安部首相や米国のオバマ大統領など世界のリーダーたちが自らのスピーチの中でそれを引用しています。

調和の概念は、宗教だけに限定されるものではなく、家族や社会および国家間の取引にまで拡大されるべきものです。しかし、今日の必須の必要性が迫られている宗教の調和とは、他の宗教の研究と、カルトではない他の宗教の容認も、霊的な光の純粋な道なのです。これらの両方において、日本はまだ長い道のりを歩まねばなりません。仏教の多くの様々な宗派の間に善意が不足しているように見えるからです。また、他の宗教に関する基礎的な知識も欠如していると言えるでしょう。仏教が生まれた母体であるヒンドゥ教でさえ、あまり知られていないのです。

この宗教の調和を促進する上で、異教間のフォーラム（公開討論）が、大きな役割を果たすでしょう。そのようなフォーラムは、米国、南アフリカ、オーストラリアなどの国々では盛んで、異なる宗教の指導者が定期的に集まり、研究や討議を通して他の宗教に慣れ親しみ、共通の問題について意見交換が

できる場を提供しています。各宗教の信者たちに善意のメッセージを送ることで、宗教間の調和を築くには、大いに役立つでしょう。能力に限界があるとはいえ、私もここでそのようなフォーラムを試み、失敗しました。誰かが近い将来に日本でこれを実現して下さることを熱烈に私は祈っております。

#### 4) 仕事

日本人の仕事への献身と完璧を目指しての努力が、無比の製品を作り、世界市場を引きつけていることは、よく知られています。しかしながら、仕事に集中している人たちを注意深く観察すると、過酷な仕事のプレッシャーからくるもの凄いストレスと緊張は、人間関係だけではなく、体と心の健康にひびいていることが分かります。

それゆえに、誰もが真剣に知りたがっているのは、放棄することのできない義務を遂行している間も、ストレスを感じることなく、健康と心の平安を満喫し、その気になりさえすれば、霊的になることさえ可能な状態に、どうしたらなれるかということです。このために、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの「カルマ・ヨーガ」が大変役立ちます。

有名なマイクロソフト社の共同創業者 ビル・ゲイツは、近年コルコタを訪

れていた間に、メディアの前で、彼はスワミー・ヴィヴェーカーナンダのカルマ・ヨーガを読んで深い感銘を受け、それがきっかけで偉大なスワミーが属していたカルカッタ（コルコタ）に関心をもつようになったと打ち明けたことが報じられています。



#### 5) 意欲

最近米国で行なわれた調査で、卒業生や会社の新入社員たちは、失敗、フラストレーション、別離、喪失、病気、あるいは死といった形で遭遇した人生の苦難や危機に、どのように直面したら良いかということについて、家庭または学校でなんらかの教育または訓練を受けてきたかという質問を受けました。これらの若者たちの大多数は、そのような訓練は全く受けたことがない、またはほんの少ししか受けていないと回答しました。

このことは日本にも当てはまります。深刻な問題に直面して若い少年や少女、

大人でさえも途方もなく苦しんでいる時、私たちは動揺します。特に、神や預言者への信仰がなく、支援を求めて右往左往しても、ほとんどの場合得ることができず、ついには自分たちの命を終わらせることを考えているのです。その人たちの親や社会の指導者たちがこの状態をなすすべもなく見てよいものでしょうか。事前に彼らにポジティブな考えや元気づけるメッセージを与えることによって、若者たちに人生の困難に勇敢に立ち向かう方法を身に付けさせるべきではないでしょうか。

私は、「インスピレーション」について書かれた日本語の本は相当数あることを知っていますが、これらの本がどの程度役立っているかは知りません。しかしながら、これらのメッセージに加えて、タゴールや特にヴィヴェーカーナンダの心にひびくメッセージの幾つかを覚え、それらに従うことは、本当に助けになるでしょう。ヴィヴェーカーナンダのメッセージは、魂にとっては（飲めば不死となる）霊薬、否定的で弱い心にとっては活力を与える強壯剤のようなものです。覚えておられるかもしれませんが、スワームージーの誕生日を国民の祝日とし「青年の日」とインド政府が宣言した主な理由のひとつは、スワームージーのメッセージにはあらゆる人々、特に若者を理想的な生活を送る気にさせる、巨大な強さがあると、政府が感じたからです。皆

様方により良く理解して頂くために、ここにスワームージーの言葉の幾つかを取り上げます。

- ・全ての強さはあなたの中にある。それを現しなさい！
- ・強さは生、弱さは死。
- ・弱さの治療法は、悩むことではなく、力強さを思うこと。
- ・非利己的であることは神である。

## 6) インドと日本の相互関係

ここ数年、インドと日本の相互関係は、インドが外国に市場を開放したことと、インドのIT産業が台頭しつつあることを受けて、特に経済部門で進展しています。その他の技術移転および製品、または最近の日印包括的経済連携協定が、この関係をいっそう強化しています。外交面でも、経済面でも、この日印関係は、時折妨げられることはあるものの、文化交流によってこそ継続していくことができるのです。外交面では、1988年のインドが核実験を行なった時に関係が冷え込みました。インド文化の真価を認め、より深く理解するには、インド文化の基盤であり、まさしく土台である、インドの精神的伝統について理解することが必要です。個人であれ、国家であれ、人生のすべての局面において、普遍性と調和のある精神性・霊性、神を重んじることが「インド人らしさ」であり、これこそがイ



ンド人の特性です。この「インド人らしさ」を理解するために、タゴールとヴィヴェーカーナンダの二人が、大役役に立つでしょう。

終わりに、インド人との取引や交渉が必要な企業幹部や官僚の皆様方に、自分の使命を果たせるよう、大胆不敵にも、私から助言をさせていただきます。それは、インドの宗教と哲学や、ガンディー、ヴィヴェーカーナンダ、タゴールなどの偉人について読み、それを、インド人の取引相手や交渉相手に話してみることです。その効果には目を見張ることでしょう。まれに例外はありますが、企業幹部はもとより、インド人は概して、インドの宗教、哲学、特に偉大な同胞について語るのが、大好きだからです。

## 結論

この国が直面する深刻な問題に取り組む上で、ヴィヴェーカーナンダとタゴールを学ぶことがいかに役立つかについて議論してきましたが、宗教家であるから不適切だとして、ヴィヴェーカーナンダを切り捨てるとか、神秘的な詩人だから理解できないなどといって、タゴールを拒否するのは、愚の骨頂です。この二人は、個人と国家の両方に対して核心を突いたメッセージを持っています。このことは、インド人に対して真実であるばかりでなく、

日本など他の国々の人々に対してもまた真実なのです。これは、アメリカの有名なスミソニアン大学が、アメリカの文化と成長に著しく貢献した、米国人以外の31人を特集した展示会を開催した際、スワミー・ヴィヴェーカーナンダがその中に含まれている、という報告で立証されています。

もうひとつの日本人の特性は、あるアイデアが良い、あるいは有益であると気付くと、その由来に関係なく、単に論議したり夢みたりするのではなく、それを適合させ、導入します。ひとたびタゴールやスワミーの考えが日本人と日本国に極めて有益であると確信すれば、次はその導入を考えるでしょう。それには二人についての認識を一段と深める必要があります。

これについて私には次のような提案があります。

・第一は、講演や文化活動など定期的に行なわれるプログラムの継続に併せて、新たにタゴールとヴィヴェーカーナンダの合同または個別の展示会を日本中の特に教育機関で開催するのです。二人についての認識をさらに深めるためです。私の認識では、芸術作品を紹介する催しが数回開催された以外には、タゴールに関する本格的な展示会はまだ開かれたことはありません。しかし、私たちのヴェーダーンタ協会は、前述

のように、スワームジーに関するさ  
さやかな展示会を数か所で催し、好評  
を博しました。

・第二は、日本においては、知識やア  
イデアを与えるのに漫画本が非常に一  
般的で、人気のある手段であり、ガン  
ディーに関する漫画はすでに数冊出版  
されています。タゴールとヴィヴェー  
カーナンダについての漫画シリーズも  
出版されるべきでしょう。

・第三は、インドの文化紹介と、イン  
ドの三大偉人である、ガンディー、ス  
ワームジー、タゴールの伝記と彼ら  
のメッセージを収めた中型本の出版で  
す。公立図書館と教育機関の図書館に  
もおくべきです。さらによいのは、こ  
れらの本のいずれかを、学校の授業課  
目に組み入れることです。前述したこ  
とは異なる方法で、インド文化への  
知識を深め、結果的に学生を育てるこ  
とになるでしょう。

国際交流基金や文部科学省、インド  
大使館と共に、これらの出版に取り組  
み、広範囲の読者に届けることも可能  
でしょう。非現実的ではないにせよ、  
この提案が野心的と呼ばれるのを覚悟  
の上で断言します。これらの本を学生  
や一般大衆に紹介することは、日印関  
係のさらに強化に大きく役立つばかり  
でなく、さきほどお話した日本を苦し  
めている深刻な欠落の穴埋めに貢献す  
ると確信しています。

同じように、インド人は、称賛に値す  
る日本人の特性を身につけるように健  
闘すべきです。つまり、義務に対する  
遂行、規律正しさ、団結すること、他  
人との取引や交渉で正直であるべきな  
ど、一般社会における社会倫理の尊重  
などです。

このようにあらゆる部門で協力し合  
うことによって、私たち両国の国民は、  
二カ国間によりよい絆を築くというス  
ワームジー、タゴール、岡倉天心の  
長年の夢を実現することができるで  
しょう。これこそが、日印関係における  
三人の偉大なパイオニアたちの神聖な  
思い出を称える最もふさわしい賛辞と  
なるでしょう。

この比較的長いスピーチに耳を傾け  
て下さいました皆様に、心から御礼申  
し上げます。

## 2012年6月の活動

東京例会：6月2日（土）、スワーム  
ジー・メーダサーナンダジは東京・イン  
ド大使館で午後2時から『バガヴァッ  
ド・ギーター』の講義を行いました。  
今回も、『第二章 論理的思考の道』の  
中で説かれているアートマンについて  
解説しました。参加者は約30名でした。

東京ヨガセンターで講話：6月2日

(土)、スワミー・メーダサーナンダジは新宿区の東京ヨガセンターで「カルマとカルマの結果」について講話を行いました。参加者は約 25 名でした。当日の講話について同センター事務局の羽成（はなり）千亜希氏から、「皆さん、とても充実した時間を過ごすことができました」とのコメントをいただきました。

沙羅舎で講話：6月16日（土）、スワミー・メーダサーナンダジは東京・三鷹市の沙羅舎で「神とは何か」をテーマに講話を行いました。参加者は約 15 名でした。主催者は片岡氏、町田氏でした。

逗子例会：6月17日（日）、逗子別館で6月の逗子例会およびブッダ生誕祝賀会が開催されました。この日は、曹洞宗・長寿院（千葉県成田市）の篠原鋭一住職にお越しいただき、「主ブッダの説いた奉仕の教えの実践」をテーマに講話をいただきました。ご住職はNPO法人 自殺防止ネットワーク風の理事長でもあられ、同ネットワークの活動である24時間の電話相談を自ら担当されています。講話ではご自身のこうした活動について触れられ、様々な苦しみを抱えている方たちに対して仏教の教えに基づいたご奉仕をされている様子について、熱意溢れるお話をいただきました。

午後の部では、インド巡礼の旅をテー

マに、協会の書記である三田村賢一氏がスライドによる写真鑑賞会を行いました。三田村氏は今年4月、協会の信者であるご友人等と総勢8名でインドを旅行し、協会のインド本部であるコルカタのベルル・マトやベナレスのセンター等を訪問しました。スライドショーでは、旅行中に撮影された数々の美しい写真がキャプション付で上手に紹介され、旅行参加者の楽しいナレーションも入り、笑いの絶えない大変和やかなひとときとなりました。

参加者は約 40 名でした。

ナラ・ナーラーヤナ活動：6月22日（金）、月例の横浜市中区寿町ホームレス支援活動に協会から6名が参加しました。朝は雨天でしたが、食事の支度を終え配食が始まる頃には幸い雨がやみ、受給者の方々は傘を差す煩わしさもなく列を作って食事をすることができました。700食程を配りました。また、協会に届いた約750本のひげそりを「さなぎの家」に届けました。

支援活動を続けているうちにホームレスの方々と知り合う機会ができ、知り合った方の中にはボランティアと会うのを心待ちにしている方々もいます。協会のボランティアの一人から、「こうした方々とのコミュニケーションは、物品の提供と同じくらい大切なご奉仕ではないか」というコメントをいただきました。

福岡講話：6月23日（土）、福岡市で開催されたサットサンガにスワミー・メーダサーナンダジが参加し、午前8時からの瞑想会では誘導瞑想を、午前10時半からは「ポジティブな生き方」をテーマに講演を行いました。主催はヨガ講師の宮木サリ氏で、参加者は約25名でした。

飯塚講話：6月24日（日）、福岡県飯塚市のサットサンガでスワミー・メーダサーナンダジが講話を行いました。午前の部では「健康で長生きする秘訣」について、午後の部では「内なる平安」をテーマに話しました。主催はヨガ講師の小林氏、井出氏で、参加者は約25名でした。井出氏から感想をいただきましたのでその一部をご紹介します。

「心の幸せのためにどうして20分の瞑想の時間がないのですか、というマハーラージの耳の痛い言葉に苦笑いしてしまいました。過去や未来の心配をするのではなく、今をしっかり生きることは、わかってはいるけど、なかなか難しいですね。でも、マハーラージのお話を聴いて、また再確認しました。心配事の90パーセントは起こりませんと言っていたら、皆さんも納得して、ちょっとホッとしました」

シヴァナンダ・センターで講話：6月30日（土）、東京都杉並区のシヴァナンダ・ヨガ・ジャパン東京センターは、1年前に創立されました。今回は一周年

記念のセレモニーがありました。そのプログラムの中に、マハーラージの「内なる平安」があり、マハーラージはそのテーマでお話をされました。セレモニーの参加者は約80名でした。

## 忘れられない物語

### しっぽの物語

ある姫の話がある。姫は目の具合が少し悪かったのだが、自分ではとても具合が悪いと思っていた。王の娘として甘やかされていたので、姫はいつも泣いていた。医者が薬をつけようとしても治療をいやがり、目の痛むところを触ってばかりいた。そのうち目の具合はどんどん悪くなり、遂に王が、姫の目を治したものに大きな褒美を与えること発表した。少しして、男がやって来た。男は有名な医者だと名乗ったが、本当は医者ではなかった。

男は必ず姫の目を治せると言い、姫の部屋に通された。目を診察した後、男が叫んだ。「ああ、何ということだ！」姫が尋ねた。「どうしたというの」「姫様の目は大したことはありませんが、他に大変悪いところがあるのです」姫は驚いて言った。「一体どこが悪いの」男は言いにくそうに答えた。「本当に深刻な状態ですので、姫様にお話ししない方がいいと思います」姫がどれほど言っても、男は、王の許可がなければ

話せないと言って、姫に言おうとしなかった。

王がやって来たが、男はそれでもなかなか話そうとしなかった。遂に王は言った。「どこが悪くてもいいから、とにかく言え。これは命令だ！」

やっと男は口を開いた。「姫様の目は数日でよくなるでしょうから、大丈夫です。問題は目ではありません。実は、姫様にはしっぽが生えてくるのです。少なくとも 16m にはなるでしょう。あと少しで生え始めます。しっぽが生える瞬間に姫様が気付いたら、しっぽが伸びないように私が何とかできるかもしれません」

この話を聞いて、皆が大変心配した。姫はどうしたか？ 昼も夜もずっとベッドの中で、しっぽの生えてくる瞬間を見逃すまいと全神経を集中させていた。こうして数日後、姫の目はよくなった。

この話から、普段私たちが物事にどう反応しているかが分かる。小さな問題が気になり出すと、すべてがそれを中心に回り出すのだ。これまで、何度も生まれてきてはこのような生き方を繰り返してきた。「私のやりたいことが先、私の欲しいものが先、私の好き嫌いが先だ！」このような考え方を基にしていたのでは、これからも変わらない。願望と嫌悪の衝動に流されて、出口の

見つからないままサムサーラ（誕生と死の繰り返し）の道をたどり続けるのだ。好きなもの、嫌いなものへの執着を源として生まれ、進み続けている限り、安まることはない。

（Ringu Tulku Rinpoche 著『Daring Steps toward Fearlessness: The Three Vehicles of Buddhism』より）

## 今月の思想

「すべての行いを通して福音を宣べ伝えなさい。必要であれば言葉を使いなさい」

（アッシジの聖フランチェスコ）

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)